

語りベシアター

『大阪御堂筋ものがたり』

— オンライン配信に向けた
作品制作と活用の可能性

栗本智代
Kurimoto Tomoyo



語りと映像に音楽の生演奏を加えた独自の手法により、地域の歴史や文化、まちの物語を伝えてきた「語りベシアター」。コロナ禍での活動継続のため、初めて、オンライン視聴者に向けて新たな形式で作品をつくり、収録・公開した。その制作過程を振り返りながら、今後の展望も含めて報告する。

「くりもと・ともよ」

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1988年大阪ガス(株)入社。商品開発部を経て、1991年より現職。まちの個性や本質を歴史・文化的側面から探究し、「ストーリー」による都市魅力の発掘・創造に取り組む。独自の手法による「語りベシアター」は、自治体の主催事業や民間の勉強会などでも展開。一方で、フィールドワークやインタビューを中心とした執筆も行う。

「語りベシアター」の活動趣旨と展開

「語りベシアター」の活動を立ち上げたのは、1994年のことである。

当時、関西の中でも特に大阪は、豊潤な歴史・文化的資源があるにもかかわらずその魅力があまりに知られておらず、まちに伝承力が乏しいことが非常に問題であると

捉えた。この対策として、まず、地域に眠る歴史や文化を掘り起こし、まちの物語を多くの人に知ってもらい、わがまちにもっと誇りを持つてもらうことが大切だと考えた。

そこで「楽しくわかりやすく」伝えることを重視し、短いストーリー仕立てにしたシナリオを起し、語り(朗読)と映像、そして音楽の生演奏や演劇的な演出を交えた独自の表現手法を創った。大

阪から阪神間へとフィールドを広げながら、自治体の記念行事や民間団体の勉強会で公演を重ね、2019年には、在シンガポール日本国大使館関連部署の記念事業にも招待され、大変好評をいただいた。同時に裾野を広げるためワークショップ形式で語り手・作り手の育成も順調に進めてきた。ところがコロナ禍で、活動中止を余儀なくされた。そんな中で、オンラインであれば発信できると、新たな形式による作品制作への手探りが始まった。

オンライン配信に向けて

記録用に公演の様相を動画収録したものは、実際に舞台を見た記憶を回想するにはよいが、ライブならではの臨場感には十分には伝えられない。特に「語りベシアター」は、スクリーンに映写するパワーポイント映像・語り・演奏の三者のライブならではのコラボレーションにより高い訴求力を創出するため、記録映像では魅力が半減してしまう。しかし、オンライン

配信の普及に合わせ、そのなかでいかにオリジナリティを維持しながら「楽しくわかりやすく」伝えられるか、実験的に挑戦することになった。

2020年度、最初の試みとして、大阪の代表的な年中行事であり、疫病退散の祈りをこめた祭である「天神祭」をテーマに、オンライン配信用の作品を制作・配信した。

そして2021年度は第2弾として、『近代から未来へ 大阪御堂筋ものがたり』と題した作品制作に取り組んだ。以前から随時更新しながら上演していた作品で、近代大阪からの御堂筋を中心とした大阪の発展史をまとめた『大阪モダニズム物語』『御堂筋ものがたり』をさらにリニューアルした内容である。

以下、この制作について紹介する。

オンラインならではの苦勞

「語りベシアター」は、いわゆる「紙芝居」のように、写真や絵図



語りベシアター ONLINE『近代から未来へ 大阪御堂筋ものがたり』。

序章 近代都市～モダン大阪～の誕生 (19分)

本章 大大阪の革命的まちづくり (22分)

終章 未来へ向かって (16分)

YouTubeで公開中。



配信された映像、「序章」プロローグの一場面 (英語字幕版)。

に解説が入る形式で、「紙」の部分をパワーポイントが担っている。文献調査や取材をベースに、使用可能な画像を取捨選択しながら台本を書き下ろす。また、わかりやすく解説するために、地図やイラストを新たに描き起こす。今回も、歴史はもちろん未来へ向けた街づくりについても可能な限り最新情報を入れ、また、現在の街の様子を撮影した動画も盛り込み、過去と今日、未来を繋ぐメッセージを届けられるよう手を加えた。

これらが固まると、最後に音楽的な演出を行う。今回は、出演者でフルート奏者の青木美江さん作曲のオリジナル曲を何曲もちりばめた。単なるバックミュージックではなく内容がより伝わるように、それぞれのシーンにあわせて音響効果を、ライブ同様に発揮できるように留意した。

収録場所は、大阪ガスの福利施設の多目的ホールを使用した。スクリーン上映はせず、語り手と演奏者だけを収録し、編集で画像を組み入れて説明画像をより鮮明に再現することにした。初回の「天

神祭」収録の際は、説明画像・語り手・音楽家の切り替えのタイミングや各々が映る尺について、ちょうどバランスの良いポイントを見つけてるのが難しく、時間をかけて、何度も編集をやり直した。その経験を活かす形で、2年目の今回は、切り替えの目安を記した撮影台本を自ら制作し、それをベースに収録を進めた。

もうひとつの演出として、背景となる部分を黒布で覆い足元もあわせて深い茶色のシートを敷き詰めた。また出演メンバーは、作品テーマの時代である近代大阪のモダンズムファッション風の装いで合わせるため、舞台衣装専門の会社の協力を得た。照明を入れてカメラを通して見ると、画面に出演者が浮かび上がるような、非日常的な雰囲気が出来上がっており、独自の臨場感が楽しめる好評をいただいている。

なお、「語りベシアターONLINE」の作品は、いずれも、留学生や今後のインバウンドを意識して、英語字幕版も制作・配信している。

コロナ禍からポストコロナにおける活用の可能性

作品の内容として、序章・本章では、明治以降モダン都市として大阪が発展した様子、大大阪と呼ばれた時代の御堂筋を中心とした革命的な都市づくりについて紹介している。もともとの「御堂筋」は、幅が約6メートル、長さが約1・3キロの細い道だったのを、幅約44メートル、長さ4キロ以上の大道路に拡張し、同時に地下鉄も建設するという計画が、第7代大阪市長関一氏により実施された。当時の様子を、さまざまなエピソードを交えてまとめてみた。

さらに終章では、戦後から今日までの取り組みを紹介し、近未来への展望を語っている。「御堂筋」は、2017年5月11日に、完成80周年を迎えたことを契機に、「みちから未来を考える」をコンセプトに、車から人中心のみちへと空間再編を目指す取り組みが始まった。公民連携してまちづくりのあり方を議論しながら、ハードとしては、側道を歩行者空間に整



『近代から未来へ 大阪御堂筋ものがたり』本章より、地下鉄（御堂筋線）の工事の様子。左奥は建設中の大阪ガスビル。写真提供／大阪市



歩行者空間で定期的開催されるようになった御堂筋のマルシェ。



大地をキャンパスにして花びらで描く「インフィオラータ」はイタリアやスペインの歴史あるアートイベント。御堂筋でも2019年からクリスマスシーズンに開催されている。

備する工事が進捗している。一方で、歩行者利便増進道路（通称…ほこみち）制度の導入で、指定された特別区域では、歩行者がくつろいだり、交流を楽しんだりするような空間が形成されている。社会実験も含め、賑わい創出の工夫がさらに期待される。

今年85周年を迎えたが、次なるアニバーサリーである88周年、つまり米寿の年は、大阪・関西万博

開催年と重なる。さらに100周年へと、未来に向かって地域あげての精力的な取り組みが、新たなシナリオとして加わり続けるのが、非常に楽しみである。

今日、コロナ禍がまだ完全に収束しない状況ではあるが、「With コロナ」の姿勢で、感染対策をとりながら恒例の行事やイベントが徐々に再開されはじめ、人の流れも少しずつ戻りつつある。そんな

中で、「語りベシアター ONLINE」

を見た後、実際にまちを歩くと、風景や建物の見え方が変わり、より地域に関心が深まったという人が少しでも増えることを願っている。今後は、問題意識やテーマが重なる団体やイベントには、コンテンツとしてリンクを貼ってもらいながら、実際にライブとしても語りベシアターの公演を開催する計画も進めている。さらに、学校

教育現場での活動展開にも新たにチャレンジしていく予定である。

歴史を振り返る材料として、まちづくりや賑わいづくりのヒントとして、今後は、リアルとオンラインの相乗効果をねらいながら、関係各所に働きかけ、活用していただく方法を模索していきたい。